
Kill Me Tender

明日風エリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K i l l M e T e n d e r

【Nコード】

N 7 6 9 8 H

【作者名】

明日風エリ

【あらすじ】

悪霊コツクリさんに憑かれた友人・恵を救うため、凜子は悪霊退治を俊一という青年に依頼した。しかし、断られてしまう。凜子は自分の力だけでどうにかしようとするが……。

（前書き）

流血表現があります。苦手な方はご注意ください。

放課後の誰もいない教室に、黒ぶち眼鏡にみつあみの少女がいた。
名を、恵という。

彼女が座る席の、机の上には……

「あ」から「ん」までの五十音に、濁点、半濁点。
「はい」「いいえ」、それに鳥居のマークの書かれた紙。

その上に置かれた十円玉に指をあて、彼女は静かに呟いた。

「コックリさん、コックリさん。来てください」

黒板消しが床に落ち、窓ガラスが震えだした。

「コックリさん、コックリさん。私は可愛いですか」

十円玉が、ゆつくりと動き出した。
いいえ、で止まる。

「コックリさん、コックリさん。私は無価値な人間ですか」

はい、で止まる。

「コックリさん、コックリさん。私を好きな人は誰ですか」

今度は十円玉は文字の上を移動しては止まり、を繰り返した。

「み」「ん」「な」「お」「ま」「え」「か」「ゝ」「き」「ら

「い」

「……そうですね」

恵は無表情のまま呟いた。外は土砂降りだった。

＊

「……どうしても手伝ってもらえないんですか？」

「ええ」

喫茶店に、黒のショートヘアの弱気そうな女子高生と、同じく黒髪の少年が座っていた。

「悪霊退治は今は休業中です。他をあたってください」

少年、俊一は言った。それからエスプレッソをすすする。

「なんですか。恵は私の大切な友達なんですよ。頼りは貴方だけなんです」

女子高生、凜子は悲しげに言った。

「……忙しいんですよ。もうすぐ大学受験だつてあるんです。

悪霊関係なら、誰も彼も僕に相談してくる……少し疲れたんです。

僕には僕の時間が欲しいんです。どうか、休ませてください」

そうして俊一は席を立ち、2人分の支払いを済ませて去った。

＊

次の日の放課後。

「リンリンー、一緒に帰ろう！」

「……ごめん。今そんな気分じゃないの」

「えー！ 駅前においしいクレープ屋さんができたのに！ 残念、じゃあ独り占めしてくる」

凜子は友人の誘いを断った。

悪霊のことに気づいているのは、俊一を除けば自分しかない。こんなことに友人を巻き込みたくない、彼女はそう思ったのだ。

そして、凜子は靴箱を開け、固まった。

「放課後、屋上で待ってる。恵より」

そう書かれたメモが入っていたのだ。

「……私にできること、あるかな……」

凜子はメモを強く握りしめた。

*

凜子の手によって、屋上の鉄のドアは開かれた。

一面の曇り空。

ロングスカートと三つ編みを風に揺らしながら、
恵は、屋上際の低いフェンスを背にして立っていた。

「待ってたよ、凜子ちゃん」
につ、と恵は口角を吊り上げた。

凜子は怯えながらも、そつと聞いた。

「あ、あの、用事は何……？」

恵は言った。

「凜子ちゃんを殺すこと」

「え？」

次の瞬間、凜子の左上腕から血がほとばしった。

「……どうして？ 私は恵ちゃんを助けただけなのに……」
「助けたい？ 笑わせないでよ」

恵は言った。

「私がいじめられていた時、助けてくれなかったじゃない」

そう。

女子トイレで恵がバケツの水をかけられている時、凜子は見えて見ぬ

振りをした。

クラス全員が恵の存在を無視し、恵の机に花瓶が置かれた時、凜子は一緒に無視した。

その他もろもろ、その他もろもろ、数え上げればキリがない。

「今回助けたいと思ったのも偽善。悪霊という言葉に興味を持って近づいただけ。そうでしょう？」

「違う！ 私は……」

「言い訳はいらない」

今度は凜子の右脚から鮮血が噴き出した。凜子はたまらず地に倒れる。

その様子を、恵は笑いながら見ていた。

「怖いでしょ？ 凜子ちゃんね、これから、ゆっくり苦しみがら死んでいくのよ」

凜子の近くに歩み寄り、恵は仁王立ちになって倫子を見下ろした。

「まずは凜子ちゃん、あなた。それから、他の嫌いな人間もみんなコックリさんに殺してもらうんだ。

私はその後に、苦しまないようにして殺してもらうの。勿論コックリさんにね」

恵は、空中に向かって、右手で仔猫を撫でるような仕草をした。

凜子は、目を細めた。

そして、見た。

3メートルはあるかと思われる、巨大な動物がそこに浮かんでいるのを。

ミイラのようにやせ細って、肋骨が浮かび上がっている。

それとは対照的に、腹部はぽっこりと風船のように膨らんでいた。その様は、まるで地獄の餓鬼。

凜子を見据えるのは、血走った、落ち窪んだ瞳。

背中の方へと、だらりと伸びた尖った耳。まるで、死んだキリギリスの触角のよう。

その耳の付け根近くにまで裂けている、口。そこには、鋭い牙がぎっしりと並んでいる。

その中で一際長い牙、すなわち犬歯に、凜子の血が付着していた。

恵に頭を撫でられ、気持ち良さそうな表情をしている、それは。狐とも、狗とも、狸ともつかぬ。

「狐狗狸さんだよ。」

恵は微笑んだ。

「……恵ちゃんはだまされてる。悪霊のせいで、いけないことをしてる」

「そっちの仕打ちがよっぽどいけないことよ、私にとってはね」

「……ごめんなさい」

「今さら命ごいしたって遅いのよ」

「そうじゃないの。本当に……恵ちゃんを守ってあげられなくて……
…苦しませて、ごめんなさい」

「……気が変わったわ。コックリさん、凜子ちゃんの喉を食い破ってちょうだい。ピーピーうるさいのよ」

その言葉を受け、コックリさんは凜子に肉薄し……

障壁で弾かれた。

はらり、陰陽道で用いられる御札が宙を舞った。

「謝っている彼女の言葉に聞く耳を持たないのは感心しません」
凜子が振り向くと、そこに俊一が立っていた。

「どうして来てくれたんですか……？」
血を流しつつも、凜子は問いかけた。

「今彼女が言ったのと同じ、『気が変わった』というやつですよ」

恵が怒りを露わにした。

「邪魔するなら貴方も殺すわ！ 行って、コックリさん！」

コックリさんは牙の並んだ口を大きく開け、俊一を喰らわんと迫っ

た。

俊一はその口に一枚の御札を投擲した。
そして、呟いた。

「急々如律令」

途端、コックリさんは内部から爆発したかのように肉片を四方八方にまき散らした。
その肉片は、すぐに溶けるように見えなくなった。

「なんてこと……」

恵は呆然と立ち尽くした。

「一つ言っておきましょう。……悪霊によって優しい死がもたらされることなど、あり得ません」

それだけ言つと俊一は、屋上を出て行つた。

2人の少女が取り残された。

「これじゃ私、誰も殺せないじゃない!」

そう叫んだ恵に歩み寄り、凜子は平手打ちを放つた。

乾いた音が響く。

「……何があつたつて人を殺しちゃダメだよ」

「でも、クラスメイトは私をいじめ続けるのよ!？」

「大丈夫。これからは私が恵ちゃんを守るから」

「え……?」

「友達になるから」

「……………」

恵の目から、はらはら、涙がこぼれた。

*

「さて、2人はどうなったでしょうかね。ハッピーエンドだといひんですが」

校門を出た俊一は、屋上の方を見上げた。

曇り空はいつしか、青空へと変わっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7698h/>

Kill Me Tender

2010年10月29日01時46分発行